

3 絵を「見る」「想う」

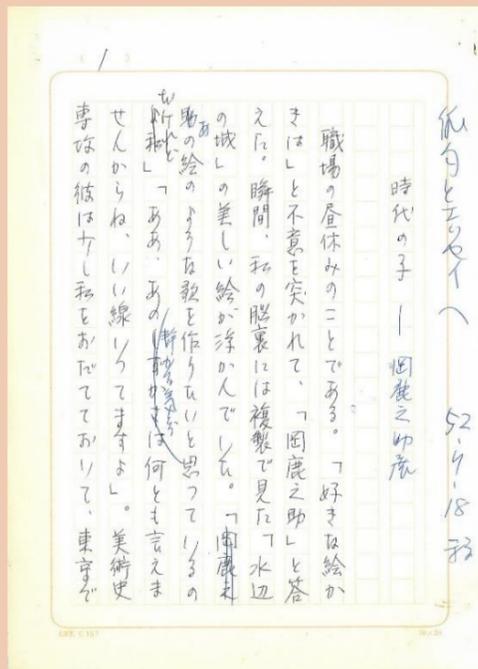
『自解100歌選』に掲載した「つぎ目よりステンドグラスは割るるならむ思ひてをれば何か慰む」に寄せた解説に、次の一文があります。

「私はパウル・クレーヤ、マリー・ローランサンも好きだが、一番好きなのは誰か、と問われれば、多分、ジョルジュ・ルオーと答えるだろう。ルオーのピエロの像を見ていると、いつでも涙が噴き出しそうになるし、聖ベロニカの像を見ていると、いつか私も、このようないい表情になれないかしら、などとあこがれてしまう」

『大西民子集—現代短歌入門(自解100歌選)』より

「涙噴くばかりに翳るゆふべあり壁に貼りおくルオーのピエロ」(No.14)

「ローランサン見む約束に木枯らしのなかを行くらむ特急「あずさ」」(No.20)



自筆原稿「時代の子——岡鹿之助展」(No.10)



写真「自宅できつるぐ民子」(民子所蔵アルバムより)
後ろの壁には、仏像が好きだった民子が惹かれたのでしょうか。笹島喜平による「弁財天」の版画が飾られています。

また、民子自身が語ったエッセイ「時代の子——岡鹿之助展」(No.10)には、彼の熱心なファンであったことや、「岡鹿之助の絵のような歌」を目標にしていたことが書かれています。

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で逄空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2022年11月10日

さいたま市立大宮図書館

さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1

電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460



うたをゆたかにするもの

—民子の愛した絵の世界—

2022年11月10日(木)~2023年1月4日(水)

No	種別	内容
1	自筆原稿	「生活の核として」大西民子 著
2	書籍	『私の短歌入門』山本友一 編 1977年刊行・初版 有斐閣
3	自筆原稿	「穂草そよぐ道のかたへに少女ひとり画架たてて白きホテルを描く」
4	自筆原稿	「霧厚き夜となりふたり朱筆を洗ひたる水捨てに出づれば」
5	書籍	『野分の章』大西民子 著 1979年刊行・初版 牧羊社 掲載歌「原色のままの黄いろを画布にのせ向日葵を描かむ夏は来向ふ」
6	自筆原稿	「自画像の頬をこの夜もそぎあつつ極道と呼ぶ生き方に似む」
7	ノートほか	民子の描いたイラストたち
8	書籍	『少女の友』実業之日本社 編 2009年刊行・初版 実業之日本社
9	書籍	『日本の童画』6巻 高島華宵/落谷虹児/中原淳一 1981年刊行・初版 第一法規出版
10	自筆原稿	「時代の子——岡鹿之助展」
11	雑誌	「芸術新潮」新潮社
12	書籍	『風景との対話』東山魁夷 著 1967年刊行 4刷 新潮社
13	自筆原稿	「涙噴くばかりに見る如き日の続くなり壁の絵をドガの踊り子に替ふ」
14	自筆原稿	「涙噴くばかりに翳るゆふべあり壁に貼りおくルオーのピエロ」
15	自筆原稿	「ふり向けばいつの間に来て草むらに音もなくあるシャガールの牛」
16	自筆色紙	「惑はしの言葉のごとく大津絵にほつつり赤し椿の花は」
17	自筆原稿	「見えぬ敵とはりあへるごとき日のゆふべ展覧会の切符来てある」
18	自筆原稿	「死にたるはいつまでも若くキャンバスをかかへて来るに幾たびか会ふ」
19	書籍	『風の曼陀羅』大西民子 著 1991年刊行・初版 短歌研究社 掲載歌「混み合へる待合室の片隅に繙帯を巻けるゴッホもあたり」
20	書籍	『光たばねて』大西民子 著 1998年刊行・初版 短歌新聞社 掲載歌「ローランサン見む約束に木枯らしのなかを行くらむ特急「あずさ」」
21	版画	「弁財天」笹島喜平 作

資料はすべて大宮図書館所蔵です

参考文献

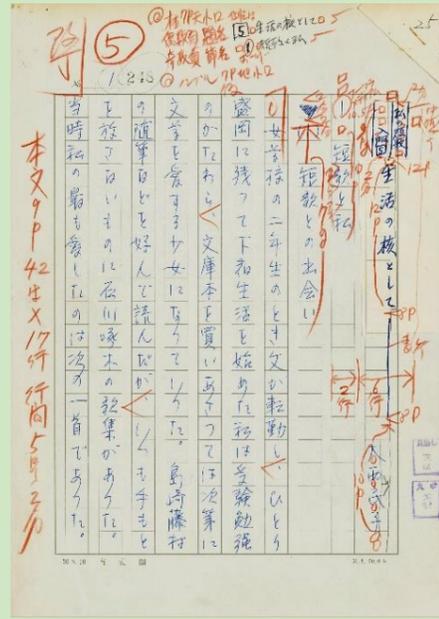
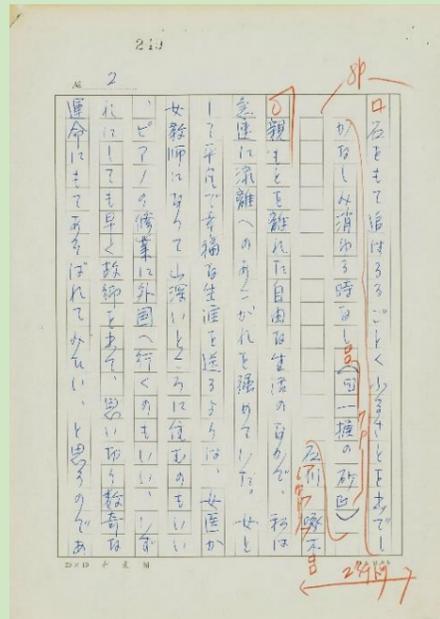
- 『シャガール(原色版美術ライブラリー 25)』シャガール/画 みすず書房 1956年
『私の短歌入門』山本友一/編 有斐閣 1977年
『大西民子集—現代短歌入門(自解100歌選)』大西民子/著 牧羊社 1986年
『ローランサンとモディリアーニ(おはなし名画シリーズ)』ローランサンほか/画 博雅堂出版 1992年
『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生—』原山喜彦/編 さきたま出版会 1995年
『まぼろしは見えなかった—大西民子随筆集—』さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年
「笹島喜平館 ホームページ」<http://www.mashiko-museum.jp/exhibitions/sasajima/index.html>
「大本山 圓満院 大津絵美術館 ホームページ」<https://enman-inn.com/about/museum/>

1 短歌の世界を広げる

歌人・大西民子は、歌を作るにあたって、絵画からも多く影響を受けたといえます。1977年に刊行された『私の短歌入門』に、民子は「生活の核として」という文章を寄せました。その中で、絵を鑑賞することも短歌を上達させるヒントになるなど、うたをゆたかにする(短歌の世界を広げる)ことについて書いています。



手作り歌集「はるのワルツ」より



自筆原稿「生活の核として」(No.1)

民子は、古典を学んだから短歌が上達するということは、あまりないのではないかと考えていたようで、それよりも「絵でしか表現できない世界を考える。そうすることによって、短歌の限界をせばめるのではなく、ぎりぎりまでひろげることに役立つ」とし、「摂取しようと思えば、短歌を育てる栄養は至るところに、幾らでもあるのではなからうか」と書いています。

また、民子自身もスランプになった時に、絵から着想を得ようとしていたのか、「ついこのあいだも歌が出来なくなって困り果てて、パウル・クレーの画集をひもといていた」ということが記されています。



手作り歌集「春のゆき」より

2 絵を「描く」

民子は、学生時代に使用していたノートをも、大人になってからも大切に保管していました。それらのノートには、勉強の合間に描かれたイラストが時に添えられています。

少女時代の民子は、姉が購読していた「少女倶楽部」や「少女の友」を読んでいたせいも、挿絵画家・落谷虹児や中原淳一の絵が好きだったようです。遺されたノートに描かれた可愛い少女や草花の絵は、それらの影響を受けていたことが見てとれます。



文集「思い出のまま」表紙部分(No.7)

また、民子は、1949(昭和24)年から1968(同43)年まで埼玉県立文化会館で働いており、芸術家との交流もあったようです。その関係で、民子自身も時に絵を描いてみることもあったのか、あるいは画家たちの姿から想像したのか、民子の歌にはしばしば「描く」ことを題材にした歌が登場します。

「霽厚き夜となりみたり朱筆を洗ひたる水捨てに出づれば」(No.4)

「原色のままの黄いろを画布にのせ向日葵を描かむ夏は来向ふ」(No.5)



手作り歌集「春のゆき」

奈良女子高等師範学校から釜石高等女学校の教員時代(1941~1948年頃)の民子は、手作りの歌集をいくつか作っており、その中にはかわいらしいモダンな女性の絵や、みずみずしい草花のイラスト(左のページ)が遺されています。